

【まとめ】

今回の調査で、古墳7基と奈良時代の掘立柱建物8棟がみつかりました。

古墳時代はこれまでの調査をあわせると古墳が37基検出されています。埋葬施設には木棺や土器棺、埴輪棺などがあり、多様な埋葬形態を持つ古墳群であることがわかりました。

これまで、古墳時代前期末に築造された梅の子塚古墳1・2号墳を中心とした標高50mの丘陵上部の造墓活動が中期後半になると終わり（II支群・IV支群）、標高30mの平坦面（I支群）に墓域が移ると考えられていましたが、古墳時代後期においても丘陵上部で古墳が築造されていたことがわかりました。

また、南山城地域では後期に入ると横穴式石室を用いる古墳が増えますが、芝山古墳群では久津川古墳群同様地面を掘り直接棺を収める伝統的な埋葬方法がとられていることもわかりました。墓づくりに関しては保守的な思想をもっていたのかもしれませんが。

古墳を造らなくなる後期末から飛鳥時代までは、集落として利用されています。

奈良時代の掘立柱建物は、これまで104棟みつかり、奈良時代の集落が古代の官道（道路跡）沿いだけでなく東側の丘陵上部まで広がっていたことがわかりました。また、これまでの調査成果から、8世紀前半に北を向く駅家と推定される建物群が建てられ、駅家廃絶以後は向きが西に傾いていくことがわかりました。

以上、今回の調査では、芝山遺跡の集落の広がりや、芝山古墳群の立地、古墳を造った集団の性格を考えるうえで貴重な知見を得ることができました。

最後になりましたが、今回の発掘調査にご参加いただいた皆様、ご指導・ご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。

表1 芝山遺跡・芝山古墳群周辺の主な出来事

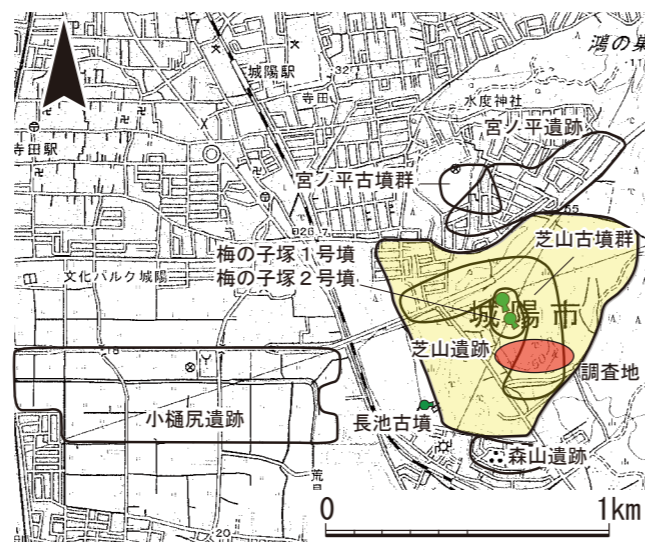
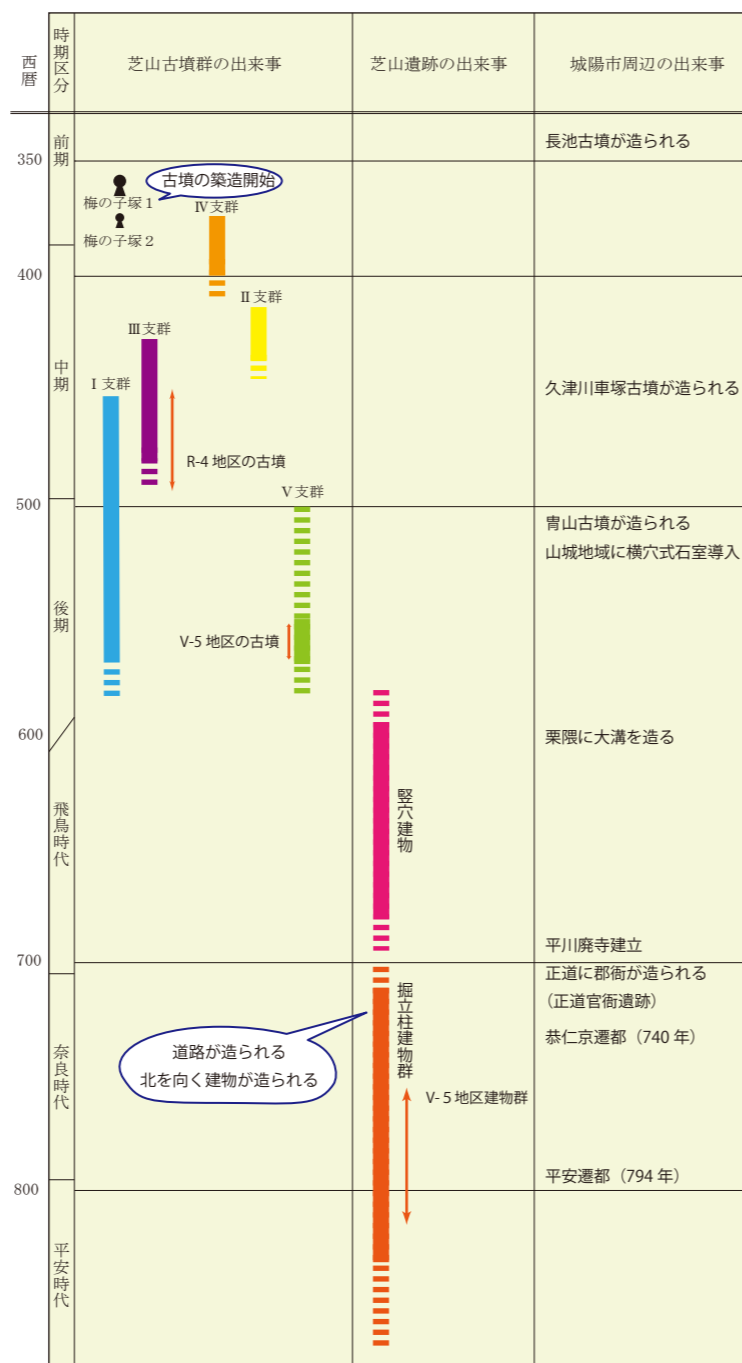


図2 調査地と周辺の主な遺跡 (国土地理院 1/25,000 宇治)

しばやま

芝山遺跡・芝山古墳群 第20・21次調査

調査場所 城陽市富野中ノ芝・北ノ芝ほか
 調査期間 令和2年4月22日～令和3年2月24日(予定)
 調査機関 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

芝山遺跡は、城陽市東部の丘陵上に位置する縄文時代から中世の遺跡です。今年度はV地区・R地区・S地区を調査しました。

芝山遺跡の発掘調査は、新名神高速道路建設に先立って平成27年から実施し、本年度が芝山遺跡発掘調査の最終年度となります。これまでの調査で、平安時代や奈良時代の掘立柱建物、道路跡、飛鳥時代の竪穴建物、古墳時代の竪穴建物や古墳などがみつかりました。

特に奈良時代の道路跡は400m以上にわたって一直線に造られており、平城京と北陸を結ぶ官道である北陸道と推定されています。また、多くの掘立柱建物が道路跡に沿ってみつかり、遺跡の北側では「駅家」と考えられる正方位の建物群がみつかりました。

一方、同遺跡内に広がる芝山古墳群は、梅の子塚1号墳(前方後円墳、全長87m)、同2号墳(前方後円墳、全長65m)を中心とした中小規模の古墳が点在しています。

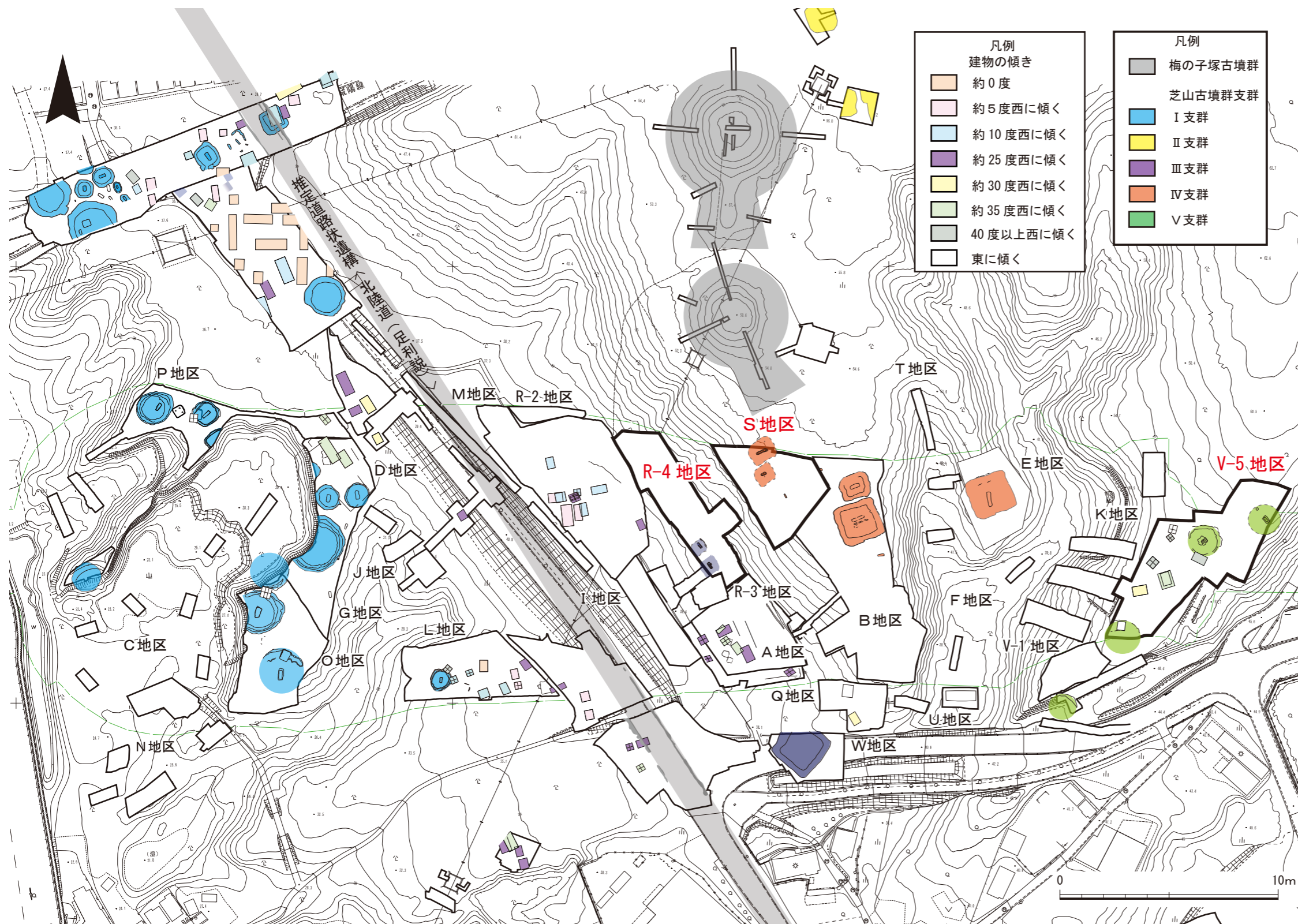


図1 調査区配置図および古墳群・掘立柱建物群分類図

古墳時代の墓

S 地区では墳丘が削平された古墳時代前期から中期にかけて造られた古墳を 2 基検出しました。墓の掘削作業中に中国製の銅鏡が出土しました。

R-4 地区では墳丘が削平された中期古墳を 2 基検出し、蛇行剣や鉄鏃などが出土しています。

V-5 地区では後期の古墳を検出し、須恵器の壺や埴輪などが見つかりました。

これまで古墳が確認されていなかった丘陵の裾部や標高の高い丘陵東側まで墓が造られていたことがわかりました。



▲ 南山城で初出土の蛇行剣の出土状態

R-4 地区で見つかった古墳の主体部から刀身が屈曲した古墳時代中期の蛇行剣が 2 本見つかりました。蛇行剣は実用品ではなく呪術的な性格をもった剣と考えられています。蛇行剣は京都府内で 3 例目の出土となります。

丘陵の上に建てられた奈良時代の建物

V-5 地区西側で奈良時代の掘立柱建物を 8 棟検出しました。掘立柱建物は方位から 4 群に分けられ、重複関係から時期差を示していることがわかりました。建物には倉庫と考えられる総柱の建物が 3 棟含まれています。建物はいずれも小型であり、一般的な住居と推定されます。



◀ 古墳の上に建てられた建物

奈良時代前半に埋まった周溝の部分に柱穴が掘られていることから、奈良時代前半以降に建てられたと考えられます。



◀ 船載方格規矩八禽鏡

S 地区で出土した中国製の銅鏡で、幾何学模様と鳥の絵が描かれ、その内側に十二支の「午・未・申・酉」の漢字が書かれています。